

令和5年度 唐津看護専門学校自己点検・自己評価

1. 自己点検・自己評価についての取り組み

学校評価は、「学校運営評価」と「授業評価」で構成する。学校評価を教育機関としての機能を包括的に判断する評価と定義し、年度末に評価を実施している。評価項目は、Ⅰ. 教育理念・教育目的 Ⅱ. 教育目標 Ⅲ. 教育課程経営 Ⅳ. 教授・学習・評価過程 Ⅴ. 経営・管理過程 Ⅵ. 入学 Ⅶ. 卒業・就学・進学 Ⅷ. 地域社会/国際交流 Ⅸ. 研究 として、5段階評価を行っている。

授業評価は、学生による教育方法と内容の評価(以下「学生による授業評価」という。)及び「教員による自己の教育方法と内容の評価(以下「教員による自己評価」という。)と定義し、授業の進め方、授業内容、学生自身の授業への取り組む姿勢など、授業アンケートを実施している。教員による自己評価は、授業の準備及び授業の実施結果と学生による授業評価の結果を踏まえた授業内容の振り返りを授業担当教員が行っている。また、令和4年度よりホームページへの公表を行っている。

2. 学校評価結果(令和4年度)

令和5年3月、看護教育自己評価指針に基づいて、大項目9領域、中項目125項目の学校評価を実施した。以下は大項目毎にその平均値を表にしたものである。(表1)

表1. 令和4年度学校評価

評価項目		高等課程	専門課程
I	教育理念・教育目的	5.0	4.6
II	教育目標	4.5	4.8
III	教育課程経営	4.7	4.7
IV	教授・学習・評価過程	4.6	4.5
V	経営・管理過程	4.7	4.5
VI	入学	4.9	4.9
VII	卒業・就業・進学	4.2	3.8
VIII	地域社会/国際交流	4.2	3.6
IX	研究	4.1	4.0

【評価基準】

- 5. 良く当てはまる
- 4. 当てはまる
- 3. 大体当てはまる
- 2. あまり当てはまらない
- 1. 当てはまらない

大項目	平均点		分析と今後の改善点
	高等課程	専門課程	
I 教育理念・教育目標	5.0	4.6	<p>教育理念・教育目的に基づいた学年別学級運営方針を年度初めに明示し、評価している。学生への周知徹底のために理念の文章を教室掲示し、唱和するなどの対策を講じている。学生のアンケート調査でも年度末時に若干評価が高くなり周知につながった。今後も入学時オリエンテーション、内部教員の初講時、各実習オリエンテーション時に各科目との関連性の説明・授業を強化する。</p> <p>看護高等課程は、令和4年度より新カリキュラムへ移行し、准看護師卒業時到達と教育目的・教育理念が詳細に明文化されたことで、共通認識が高まったことにより、平均点が高くなったものと考えられる。</p>
II 教育目標	4.5	4.8	<p>教育理念・教育目的と一貫した教育目標にし、学生が理解し実行しやすいように年次行動目標を明示し、教員間で共通認識し教育目標の達成に向け取り組んでいる。両課程とも、目標内容と到達レベルが対応してきており、改善項目を明確にして努力したことで、昨年度よりも平均点が高くなったものと考えられる。</p>

III教育課程の経営	4.7	4.7	<p>看護高等課程は、令和4年度から新カリキュラムへ、また、看護専門課程は2023年1月に申請、承認されたので2023年4月から新カリキュラムでの運営となる。両課程とも卒業時の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)及び入学受入れの方針(アドミッション・ポリシー)を明確化し、ディプロマ・ポリシーと授業目標との整合性、教育目標の到達度の評価を体系化(アセスメント・ポリシー)して明示している。</p> <p>教員は専門性をできるだけ考慮した教科・教授と考えるが、教科と実習の全てを専門のみとすることは難しく、教員同士の協力体制によって補っている。また臨床(認定看護師等)と連携を図りながら専門性を取り入れた教育の体制を整えるよう努力している。</p> <p>令和4年度より教員の自己研鑽を保障するシステムとして、ICTを活用した看護教員の継続的な学びを提供する「医学書院 NEO」を導入している。様々なノウハウを学べるセミナー、講義・演習・実習の工夫や教材開発等の情報交換などが可能となる。教員の意見を聴取し、今後も継続していく。また、授業設計に集中できる時間が確保できるように自己研修を年間15日設定しているが、取得の状況も個人差が大きい。職務満足度の向上につながるよう、計画的・協力的な業務支援ができるよう努力していく。</p> <p>コロナ禍ではあったが、学生の看護実践体験の保障として、対面授業・現地実習とオンライン授業・校内実習・オンライン実習と方法を複雑に変更することにより、学生の学びの充実や学習の継続を支援した。また、実習指導者の協力を得ながら、実習方法の工夫を行った(オンライン実習であっても指導者とのカンファレンス実施など)。</p> <p>例年同様、教員間で授業参観をして、他教員の授業評価を行い、互いの学びとなり、次の授業に活かすことができた。教員相互が成長できるように次年度も継続する。</p> <p>平均点は昨年度とほぼ変化はみられない。</p>
IV教授・学習・評価過程	4.6	4.5	<p>講義と実習が連動するように配慮し、効果的に教育を進めている。授業内容の充実に向けて、新しいDVDやシミュレーション機器等の購入を含め、教材研究を進めている。</p> <p>昨年度も新型コロナウイルスの渦中で、オンライン授業を実践するために、Zoomを活用し、感染防止の徹底と学修機会の確保の両立に向けて苦慮しながらの運営であった。行事・実習の変更が相次ぎ昨年同様怒涛の年であったが、無事に卒業単位・科目履修はできた。</p> <p>授業評価は、授業の進め方、授業内容、学生自身の授業への取り組み姿勢など、学生の授業アンケート結果を基に報告書を作成し評価している。授業担当教員が授業の準備及び授業の実施結果と学生による授業評価の結果を踏まえた授業内容の振り返りを行い、授業計画に役立てている。</p> <p>「臨床看護の実践」の講義にOSCEを継続し実施している。しかし、コロナ禍で感染拡大等も懸念された状況下であったため、今回は模擬患者さん(高齢・基礎疾患あり)の依頼はせず、教員が模擬患者となり、OSCE試験を実施した。</p> <p>両課程とも実習において、学生が看護師の視点で主体的に考える実習を意識している。そのために、ポートフォリオ、パフォーマンス評価、ルーブリックを活用しての実習を今後も継続していく。</p> <p>専任教員の担当科目については、高等課程・専門課程とも教員間の授業参観を実施し、他教員の授業の実際をみて、よい部分は取り入れ、教材研究を行い、逆さ向き授業設計、知の構造と評価規準、基準を明文化し授業展開をするよう努力している。</p>
V経営管理過程	4.7	4.5	<p>必要な教育・学習活動に関する関係者(保護者)への情報提供については、学生個々で保護者への連絡や面談等で必要時に提供を行っている。また、学生の勤務先医療機関とは、必要時報告連絡を密にし、必要な情報の提供をしている。学校評価は校内での掲示とホームページへの掲載を行っている。</p>

			<p>メンタルサポートとして、スクールカウンセラーを非常勤で依頼している。学生から申し込みがあった場合は、カウンセリングができる体制を整えているが、利用した学生はいなかった。継続してメンタルサポートが必要な学生は、近隣の心療内科や精神科で治療が継続できるよう支援している。</p> <p>教職員に対しては、当校がどのような財政基盤によって成り立っているのか理解できるように総会資料を回覧し、当校の財政基盤や決算、予算について教員会議等でも説明をするようにしている。高等課程の平均点は高く、専門課程の平均点もほぼ変化はみられない。そのため、教員の認識は少しずつ高くなったと考える。引き続き、看護学校経営の健全化と教育の質向上を図り、魅力ある学校づくりを目指していく。</p>
VI入学	4.9	4.9	<p>専門課程の入試受験者減に伴い、3次募集まで実施。令和5年度新入生33名と定員の確保が出来なかった。施設推薦社会人入試の受験者は0人。</p> <p>高等課程の入試受験者は令和5年度49人、そのうち施設推薦社会人入試の受験者は5人、近隣の県立高等学校を対象にした推薦入学による受験者は13名であった。専門課程への進学も令和4年度卒業生40名のうち29名であった。</p> <p>学生募集は近隣の高等学校に積極的に出向き進学ガイダンスを実施し、進路説明会を行っている。またコロナ禍のため代替えとしてオンライン説明会を2回実施した。参加者35名、そのうち高等課程25名(約71%)が受験し合格した。学生確保に効果的だったと判断できる。次年度は感染防止に努めながら対面でのオープンキャンパスを企画する。</p> <p>令和2年～令和4年度のコロナ禍で、特に看護高等課程1年生の退学者が増えている状況である(令和4年度は9名退学)。その理由として、高校新卒者の仕事と学業の両立の困難さが目立つ。</p> <p>さらに、留年を選択するよりは、退学を選択する者が多い(准看護師資格を取得する意思が弱い)。学生達は、自分が本当にやりたいことを見いだせず入学はしたが、仕事や学校の環境に馴染めずに退学する。また、仕事で目の当たりにする医療現場の切実な状況と患者の命の重さを痛感して、不安や困惑を持って退学している。</p> <p>中退学者の傾向としては、目的意識が低く、諦めが早く、辛抱強さがなく、「心が折れ」やすく、レジリエンスの低下が問題と考える。そのため、教員のスクール・コーチング力(折れない学生の育て方ができる教育力)の向上が必要である。</p>
VII卒業 就職・進学	4.2	3.8	<p>卒業後の進路は、専門課程 卒業生25名中、県内就職が19名である。他県就職6名、未就職者0名、進学は0であった。また、看護師国家試験受験者数27名中24名が看護師免許取得(合格率88.8%:全国合格率90.8%)。</p> <p>高等課程 卒業生40名中、進学29名、准看護師として就職は34名であった。また、准看護師資格試験受験者数41名中40名が准看護師免許取得(合格率97.5%:県内合格率98%)。</p> <p>当校が理念としている、地域医療を担う看護師、准看護師の育成については概ね達成できているが、今後も受験対策等を強化し、合格率を上げていく必要がある。</p> <p><u>卒業後の実践能力を系統的・継続的に評価することや卒業生の活動状況の分析はできていない。看護高等課程の場合は、7割以上が本校に進学しているため継続的な把握はできる部分があるが、看護専門課程の卒業後は卒業生から連絡がない限り、動向等の把握できていないため、評価が低くなっている要因と考える。</u></p>
VIII地域社会 国際交流	4.2	3.6	<p>看護専門課程については、カリキュラムに授業科目を設定している。講師はJICA国際協力講座の協力を得て、国際看護を実践した体験のある看護師に依頼し、国際的視野を広げることの大切さを学生は感じてきた。</p> <p>外国からの帰国学生や留学生の受け入れ体制は十分に整っていない。平成24年度学則からは、日本の准看護師免許を取得した者で、日本</p>

			<p>語能力検定試験N1認定の人に限定し、専門課程の受験資格を変更しているが、受験生や入学生はいない。</p> <p><u>勤労学生がほとんどであり、ボランティアなどの活動ができにくい状況である。そこで、各課程3回／年の学校大掃除の時間を活用し、松浦川河川敷の清掃を6回／年実施を予定していたが、コロナ禍で学生が登校できないこともあり、例年より活動が縮小したため平均点が低くなったものと考えられる。</u></p> <p>令和4年度は、未来ギフト実行委員会の企画依頼があり、市内小学校5・6年生に唐津で働いている大人をしってもらう目的で「唐津の医療・福祉に関係する職業」についての講話に参加しており、社会貢献の実践に努力している。</p> <p>看護師等養成所進学希望者への進路相談については、近隣の高等学校や進学ガイダンスを実施している企業に依頼されて、8回／年ガイダンスを実施した。今後も継続する。</p>
IX研究	4. 1	4. 0	<p>研修会出席教員は、受講後研修会報告書を提出する。その報告書を全教員へ回覧し研修会の内容・学びの報告をした。その時点で、出席していない教員は個人的に出席教員に質問を行い、学びの共有を行った。</p> <p>今年度もコロナ禍のため Web 研修が多かったが、リアルタイムでのオンラインやオンデマンドでの繰り返しの視聴ができるといった面では、効果的な側面もあった。</p> <p>当校で課題となる学生への支援として、教員のスクール・コーチング力(折れない学生の育て方ができる教育力)の向上のため、全教員の集合研修を12月と3月に実施した。教員自身も自己認識を高めるために、PSA(精神医学ベースのパーソナリティ診断分析)を実施し、学生への支援へどの様に活用していくかを検討し、次年度は実践に移行していく。</p> <p>今年度はコロナ禍の影響で学会や研修会での応募も少なく、発表はしていない。今後とも看護教育の質向上に向けて、研究課題を各教員がもち計画的に取り組むことができるように支援が必要である。</p>